別記様式

令和４年度学校評価報告書

令和５年３月３１日

北海道教育委員会教育長　様

北海道鵡川高等学校長　三　村　素　道　印

次のとおり令和４年度の学校評価について報告します。

１　本年度の重点目標

(1)生徒のより良い自己実現を目指し、絶えず研鑽に励み、専門性を高め、質の高い教育活動の実践に努めるとともに、生徒が「行きたい」と思う学校づくりに努める 。
(2)学校課題の解決を図るため、地域や専門機関等との連携を図りながら、積極的に教育活動の改善・充実に努める 。
(3)学校経営参画意識の高揚を図り、組織体としての機能を高め、協働体制の確立に努める 。
(4)連携型中高一貫教育等の充実を図り、地域から信頼され、「生かしたい」と思われる学校づくりに努める 。
(5)地域や保護者等との連携・協調に努め、教育環境の整備に努めるとともに、保護者が「行かせたい」と思う学校づくりに努める 。
(6)学校における働き方改革「北海道アクション・プラン」を推進し、その具現化を図る 。

２　自己評価結果・学校関係者評価結果の概要と今後の改善方策

評価項目	自己評価の結果	学校関係者評価の結果
学校経営	□生徒のより良い自己実現を目指し、絶えず研鑽に励み、専門性を高め、質の高い教育活動の実践に努めた。 □学校課題の解決を図るため、地域や専門機関等との連携を図りながら、積極的に教育活動の改善・充実に努めた。 □学校経営参画意識の高揚を図り、組織体としての機能を高め、協働体制の確立に努めた。 □連携型中高一貫教育等の充実を図り、地域から信頼され、愛される学校づくりに努めた。 □地域や保護者等との連携・協調に努め、教育環境の整備に努めた。 □学校における働き方改革「北海道アクション・プラン」を推進し、その具現化を図った。	・目指す生徒像、育成したい生徒像については、生徒の変化からも着実に成果が現れていると思います。改善に向けた取組の中では、コンソーシアムを含めた地域との連携において配置されているコーディネーターの活用が重要だと思います。 ・鵡川高校では「デュアルシステム」や「むかわ学」などで地域の方々と関わる活動があります。 ・町民が高校生を見守り、応援してもらえるような高校になればいいと思います。 ・連携型中学校からの進学者率を高めるための制服代補助等は町内のもう一つの道立学校との関係性も考慮に入れる必要性がある。
改善方策	・昨年度よりも質・量ともにブラッシュアップされた校内研修を行うことで、生徒の実態や現在の教育に求められている学校教育活動について全体で目線を合わせることができた。引き続き、公開授業の設定、改善アンケートの実施、校内外における研修を実施していく。 ・学校内での教育活動について、必要に応じてコンソーシアムに参加している団体の協力を得ながら進めることができた。今後、コンソーシアム参加団体がさらに本校との連携を進められるような施策を検討し、実施する。 ・校内研修等を通して、職員間の目線合わせとゴールの共有を行った結果、協働体制の数値が高まった。その反面、連絡周知等において、連絡系統の組織的な動きを必要とする場面もみられたので改善する。 ・連携学習会や合同講演会などのあり方を検討し、より中学生が鵡川高校生徒の良さに触れられる機会を多く設定していく。 ・連携中学からの進学者率を高めるため、連携校からの進学者に対して補助増へ向けた動き等が図れないかを要望していく。 ・中高連携事業において、中学校職員の鵡川高校における取組に対する理解の促進を目指す。 ・地域、保護者、小中学生とその教員のニーズを分析するために、次年度の早い段階で	

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">むかわ町の地域の子どもたちやその保護者、小中学校の先生方が高校に対して求めるものを調査し、その結果として求められている学校の在り方を検討する。
・新規事業が増える中で表出した課題が明確になりつつあるので、次年度は業務の平準化をめざし、本校における働き方改革実現を目指していく。
・個別最適な学びの中で進路を意識した指導を行った結果、今年度は国公立大学合格者（小樽商科大学、釧路公立大学各1名）を輩出する等、一定の成果が見られた。今後も一人一人の能力を最大限に伸ばしていく。
・次年度もコンソーシアムや地域の力を借りながら、「むかわ学」や「デュアルシステム」を通して、積極的に地域に出て学びを深め、高校生のアイディアで地域の魅力化やグローバル化を後押しできる活動を実践する。
・個別最適な学びの場としての「むかわ学」、「チャレンジスタディ」になるよう、生徒の将来像を見据えたカリキュラムマネジメントを実践する。</td></tr>
<tr><td>学習指導</td><td>□生徒による授業評価の実施・分析を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」に係るｱｸﾃｨﾌﾞ･ﾗｰﾆﾝｸﾞの視点から授業改善を行った。
□WDO（why? Discussion Output）を踏まえ「授業改善の観点」に基づいた教育活動を実践した。
□説明責任に応えうる教科シラバスに基づいた授業実践及び、本校で育成を目指す資質・能力に沿ったキールーブリックに沿った観点別評価を実施した。
□地域をキャンパスとした探究的な学び「むかわ学」及び、地域をキャンパスとし生徒の特性や能力を伸張させる「ﾁｬﾚﾝｼﾞｽﾀﾃﾞｨ」を効果的に実施した。
□個別最適な学びと協働的な学びの実践を支える1人1台端末を活用した。</td><td>・探究学習におけるICT活用事例について、効果的な取組を中高の「むかわ学」で取り入れていただきたいと思います。
・１年生では朝読書の時間を使いタイピングの練習をすることもあったと聞き、キーボードになれるためにとてもいいと思いました。</td></tr>
<tr><td>改善方策</td><td colspan="2">・今年度は授業でのBYOD端末の活用を各教科で実施し、ICTを取り入れたアクティブラーニングの視点での深い学びと、それを振り返るための教員全体研修ができたので、次年
度も継続する。
・今年度は観点別評価の実践と研修を行ってきた。今後も職員がWDOを意識し、需要に組み込めるような体制を職員全体で共有化していく。
・新しい指導要領や本校で育成を目指す資質・能力を踏まえ、今年度作成したシラバスを土台に、引き続き指導と評価の一体化を実現できるシラバスを作成する。
・今年度の各教科における観点別評価の実践を踏まえ、次年度に向けてさらに保護者、生徒に信頼される評価の構築を図る。
・生徒が今まで以上に意欲的に取り組める方策を考える。
・「むかわ学」において、２、3学年でのゼミの体制や発表会の目的、方法をアップデートし、より生徒が主体的に取り組めるような体制作りをする。
・チャレンジスタディにおいて、今まで以上に積極的に地域人材を活用する。
・スマホで対応できる学習が多かったので、キーボード付きの端末を持参せず、スマホで対応することが多くなった。キーボードを活用させる方策を考える。</td></tr>
<tr><td>生徒指導</td><td>□新しい時代を生き抜く人材を育成する観点から、生徒・保護者・地域との共通理解と対話により校則を見直した。
□導入期指導の確実な実施及び、TPOに応じたマナーや、公共の場での振舞を自覚し実践させた。
□WDO（why? Discussion Output）を踏まえ、生徒の主体性を育成する生徒支援の実践及び、ICTを積極的に活用した。
□本校生徒の実態に即したCSTを実践した
□お互いに人格と個性を尊重し支え会い、多様な在り方を相互に認め合える人間関係を形成した。
□働き方改革を踏まえ、前例にとらわれない地域と連携した課外活動（部活動・生徒会活動等）の効果的に実施した。</td><td>・今の時代はいじめが表面化していなくても、SNS上で起こっていることが多いので、保護者や先生方に何かあれば相談できるように、大人も生徒の変化に気づいてあげられたらと思います。</td></tr>
</table>

改善方策	・今年度は頭髪や服装点検の方法、携帯電話の学校での扱い方等保護者、地域を巻き込み大規模な改訂を行った。今後も生徒や関係者と共通理解を図りながらアップデートしていきたい。 ・コロナ禍によって変更せざるを得なくなった内容を含め、検討と継続的指導（統一した指導）を進めていく。 ・現在授業で行っているICTやWebアプリケーションを通した活動を有効に活用し、生徒同士の双方向のやりとりを増やしていきたい。ただし、オンライン上の約束事もしっかり指導していく。 ・「ハイパーQU」や「ほっと」などのアンケートツールを活用し、心の教育（CST）の検証を実施するとともに、校内研修を通して結果を全体化し、日々の指導に繋げる。 ・いじめ撲滅に向けて、全体に意識付けをする機会を増やしていくとともに、「必ずいじめは存在する」という意識で、巡回指導や全体周知を継続する。 ・部活動の完全地域移行または部活動の完全休止期間の設定などを行い、教員の時間外勤務を縮減する。	
進路指導	□本校で育成を目指す資質・能力に基づく進路シラバスの改善をした。 □生徒及び保護者の大学進学に係る意識の啓蒙の充実及び進路意識の高揚を図るための効果的な情報提供や進路学習を実施した。 □生徒の希望進路や興味関心に基づいた「チャレンジスタディ」における個別最な学びを充実させた。 □キャリア支援におけるICTの積極的な活用及び、公営塾等と協力した個別最適な学びを充実させた。 □地域の企業等と連携した「デュアルシステム」やインターンシップを充実させた。	・デュアルシステムシステムの定着、効果的な実践のため、受け入れ先企業に生徒の情報について事前の情報共有が必要だと思います。 ・「デュアルシステム」や「インターンシップ」のように、社会に出て、たくさんの大人と関わることは経験値をあげるためにとても良い活動だと思います。
改善方策	・アンケートやポートフォリオを通して、インターンシップ、デュアルシステムなど数々の行事毎に、それらが効果的に運営されているのか検証する。 ・保護者面談や三者面談について、１・２年生は夏休み、３年生は５月～など、学年にあった時期を検討し、シラバス等に組み込む。 ・昨年度の反省を踏まえた活動を行ってきたが、ＷＧが行っていた業務を分掌移管するにあたり、再度活動内容の検討と個別最適化される仕組みを検討し、実装する。 ・生徒のキャリア形成を補助するツール（本校における「Classi」）を活用しフィードバックを与えるなどして、個人のキャリア形成のモチベーションを高めていく。また、公営塾と連携し、早い段階から上級学校への進学を見据えた指導を行う。 ・デュアルシステムとインターンシップのメリットを活かした進路指導の実現を図る。	
健康・安全指導	□SC等専門家との連携のもと、個に応じた教育相談体制の充実及び、健康・安全指導におけるICTの積極的に活用した。 □個別の支援が必要な生徒の具体的な支援計画の作成及び全校体制で支援の徹底を図った。 □避難訓練や、各種講演会等の啓蒙活動等を通した危機管理意識や健康管理に対する意識を高める取組を実施した。 □生徒による主体的な校舎内外の美化活動を実施した。	・精神的に不安定になる時期の高校生に対して、より個別に手厚く面談等を行って、生徒の話を聞いてくれていると思います。今後もスクールカウンセラー等の専門家を活用しながら丁寧に心のケアをしてほしいと思います。
改善方策	・全校生徒の個別面談と、各学年で三者面談実施を通して、教育相談体制の強化を図る。また、普段Google Formsを用いて行っている体調報告について、情報提供が必要になった場合はすぐに提供できる体制を引き続き整える。 ・月1回の生徒サポート委員会を開催し、支援が必要な生徒の洗い出しと、そのサポート体制を確認する。併せて、気になる生徒の情報共有を積極的に行える環境作りを進める。 ・次年度も年に2回の避難訓練を実施し、危機管理意識を高める。併せて、「むかわ学」で防災について研究しているグループを活用し、学校全体で取り組んでいるものをさらに地域全体に広げられるようにする。 ・次年度も引き続き、毎日の保健係によるゴミ分別作業を実施するとともに、月例集会時や朝のSHRでの呼びかけを行い、啓蒙活動を進める。	

中高一貫	□「むかわスタンダード」を踏まえた（小）中高の学びの接続を行った。 □むかわ学に係る学びの接続を踏まえた地域貢献を行った。 □本校で育成を目指す資質・能力を踏まえたキャリア教育や奉仕活動の取組内容及び、中高の生徒間・教員間の交流を充実させた。 □中高一貫教育におけるICTの積極的に活用した。	・中高一貫校でありながら、鵡川中学校から入学する生徒が増えないことが課題だと思います。 ・先生方の対応が大変になるかもしれませんが、「漢字検定」の準備会場として鵡川高校を検定で使う際に、近隣の中学校だけでなく、小学校やその親、学校のOB,OGなど地域の人たちも一緒に受験できるよになればいいと思います。（そのような取組をしている学校があるそうです）そうすれば、地域の方達に鵡川高校に足を運んでもらうきっかけになるのではないかと思います。
改善方策	・合同授業の設定など中高教員が連携する場面の設定を進める。また、連携学習やボランティア活動以外でも両校が合同で学びを深められるような場面設定をする。 ・今年度小中高の連携で作成した国数英の3教科のスタンダードを踏まえて、学びの接続に活かす。また、中高推進委員会を中心に、「むかわ学」で両校が学んだ内容を地域に還元できるような施策を考え、実行する。 ・本校で育成を目指す資質・能力については、今年度までの積極的な活用を元にアップデートを行う。それに加え、中高間での積極的な交流場面の設定や、連携事業の大幅な刷新など、従来の取組に縛られない活動を通して、町全体で児童生徒を育成していく風土作りをする。 ・中高連携学習においてはICTを積極的に活用することができた。今後は中高生の交流場面において、双方がICTを使う場面を設定する。	
信頼される学校づくり	□本校で育成を目指す資質・能力を踏まえ、コンソーシアムを活用した地域に開かれた教育活動の充実させた。 □公営塾の活用及び、公営塾スタッフを含めたコーディネーターとの協働体制が確立した。 □地域みらい留学365を効果的に活用した。 □地域住民や保護者等に対する学校公開の実施や、各種報道機関、ＨＰや学校だより、学校説明会、ＳＮＳ等を活用した積極的な教育活動に係る情報提供発信をした。	・地域みらい留学で全国各地から生徒を受け入れることより、地元高校生にとって多様な文化・考え方を持った生徒との学びあえる環境となることが、鵡川高校の魅力化につながるものと考えています。また、関係人口創出については、大人（行政側）の思惑が強い事項なので、まずは生徒ファーストで来てくれた生徒にとって貴重な時間になるよう、地域としても協力していきたいと考えています。 ・鵡川高校に入学するまでわからなかった学校の活動もあり、中学生の保護者にも認知してもらえるように、情報発信ができればと思います。
改善方策	・次年度はコンソーシアム参加団体を学校が活用するだけでなく、コンソーシアム参加団体が学校を活用できるような場面も設定し、双方がさらに発展できるような教育活動を行っていく。 ・公営塾スタッフ、町教委、学校魅力化コーディネーターと学校との間で協働体制が確立できたので、次年度さらに効果的に連携が取れるような体制作りに努める。また、双方の情報共有に齟齬がないようにする。 ・今年度留学生については、地域の方々の協力の下、無事留学を終えられそうである。次年度については「地域未来留学３６５（１年留学)」で２名の留学生を、「地域みらい留学（３年留学)」で１名の留学生をそれぞれ確保できている。 ・留学生の存在が地域の中で浸透し、関係人口の創出に繋げられるような取組を積極的に行う。 ・保護者に対しては、学校安心メールやClassiといったツールを用いて、積極的に情報を発信できている。また、今年度も学校HP、学校だより、各種SNS（Facebook、Twitter、Instagramなど）を活用して外部へ情報を発信した。次年度はそれらのリーチ数や効果を測定し、届いて欲しい層に届くよう発信方法を検討する。	
組織運営	□中間反省や年度末反省、学校評価等を踏まえた学校課題の明確化及び、具体的な改善方策の策定（カリキュラムマネジメントによる教育活動の評価・改善）と持続可能な改善をおこなった。 □校内研修会を活用し学校課題を解決した。 □学校経営参画意識の高揚を踏まえた持続可	・複数担任制は、一人の担任の学級よりも先生方の負担も軽減でき、生徒にとってもいいと思います。

	能で円滑で組織的な業務を遂行した。 □分掌移行によるワーキンググループの発展的解消を行った。	
改善方策	・中間反省では年度内に実践すること、年度末反省では次年度に向けて実践することを明確にして確実な改善を行うことができた。今後はそれらの場で提示されたスケジュールと改善の観点に基づいた業務改善を行っていく。 ・昨年度と比較し、質・量ともに向上した各種校内研修を実施することができた。今後も引き続き、必要に応じてテーマを設定し、学校課題解決に向けた全職員での校内研修に取り組んでいく。 ・昨年度から取り組んでいる複数担任制については、各場面で取組方法を改善しながら効果的に運用できているようである。引き続き、課題を解決しながら円滑な業務遂行に努める。 ・全職員の合意の下、ワーキンググループを発展的に解消することができた。今後は分掌に移管される業務について、それぞれの分掌はもちろんのこと、全職員で課題意識を持ち、持続可能な業務へと移行できるようにする。	
教職員の資質向上	□教職員の指導力等の向上を図るための効果的な研修会の実施及び、ライフステージに応じオンラインを含めた校外研修等への積極的に参加を奨励した。 □教職員の資質能力の向上を図るための人事評価シートを活用した個別面談等を効果的な実施した。 □日常からの効果的な情報提供等を通した公務員としての服務規律の厳守にかかる意識の高揚を図った。 □教職員自ら生徒に示す積極的なチャレンジ姿勢を創出した。	・教職員に限らず、他の職種でも研修や管理職の面談等を行うことによって課題に気づき、それを解決する事で資質向上につながると思います。
改善方策	・校内研修はもちろん、学校外で行われる研修の場面も活用して、教員の学校参画意識を高め、教科指導や探究活動における指導、現代の教員として求められる資質・能力のアップデートをしながら、学校課題を解決していく姿勢作りに努める。 ・半期ごとの管理職面談を含む職員の自己・他者評価を踏まえ、個々人の中で課題意識を醸成し、その改善に向けた取組を推奨する。 ・服務規律を遵守できるよう、服務規律の意識の強化週間や定期的な情報の提供、研修を引き続き実施する。 ・教職員の余暇を増やし、その時間を使って生徒へ示すチャレンジの姿勢の資質や能力を身につける。また、それぞれの教員のスキルアップにつながる各種取組を推奨し、それに集中して取り組める体制・環境作りをする。	
働き方改革	□公立学校の教師の勤務時間の上限に関する指針（時間外の上限を「月45時間内、年360時間内」とする）順守した。 □過去の慣習にとらわれず、本校で育成を目指す資質・能力を重視した教育活動の実施及び、教育活動を再構成した。 □教師・生徒双方において自己を高めるための学校外の時間を確保した。	・世の中では働き方改革が進む一方、長時間労働、また時間外労働は未だに改善されていない教育現場もあります。生徒が通いたい学校にするためには、先生方も働きやすい環境であるべきだと思います。
改善方策	・職員の勤務時間への意識の改革を図り、地域、保護者の理解を求めながら、部活動等の課外活動の時間を削減する。 ・「北海道アクション・プラン」の具現化に向けて、職員が抱える多忙感とその原因を可視化し、改善に向けた取組を検討・実施する。 ・本校で育成を目指す資質・能力に基づき、教育活動の見直しと前例踏襲からの脱却を行い、今、目の前にいる生徒の現状に即した教育活動を行っていく。 ・定時退勤日を有名無実化しないための取組に着手するとともに、定時退勤日等関係なく職員が退勤しやすい環境作りをする。	

公表方法	・学校ホームページを通して行う。

３　添付資料

（１）令和４年度自己評価書・学校関係者評価書

（２）令和４年度学校評価アンケート集計結果

ア　職員

イ　生徒

ウ　保護者

エ　関係者